

裏路地探険

思わず引き寄せられる懐かしい風景
 味わい深い商家や寺社、小径のお地藏さん
 町並みには今も市場の歴史が垣間見える

中世の町場、広谷を歩く／養父市広谷

養父市広谷、中世この地域には大規模な市が立てられ、商いをする人々の活気であふれていた。

天正11年(1583)、羽柴秀長の令によって始まった広谷市場の歴史は、その後約360年にも及ぶ。代々出石領主から納税免除などの保護を受けた広谷市場は、町場として発展し栄えた。

かつて市は日本全国河川の近くに立てられることが多かった。広谷は18世紀の初頭には大屋川を利用して豊岡までの通船が始まっていたという。養父市場が牛の商いで賑わう一方、広谷市場は近隣の村々との産物交易によって繁昌したそう。

現在市役所が建っている辺りから、広谷小学校の北西に市が移されたのは元和5年(1619)。出石城主小出吉英によって、直角に曲がる2間半(1間は約1.8メートル)の通りと、水路を挟んだ新しい町並みが建設された。軒を連ねた家々には今も商店が多く、当時の面影が残る。

広谷を歩くと、まず、町の至る所で水路が目に入る。享保2年(1717)、大火で町一帯を焼失するという大災害に見舞われた広谷には、火事から町を守るために水路が張り巡らされたのだそう。また、この時に中心地の道路も拡張され、現在の4間道路となった。こういった早い町並みの復興は、広谷の町場としての繁栄を物語っている。

4間道路の両脇に立ち並ぶ家々の隙間には、幾通りもの細長い路地がある。そのうちの一本は旧街道。広谷と八鹿町朝倉を結びとえ坂へと延びる(漢字表記は一日、一重、一枝と数通りある)。この坂は古くから主要街道として利用されており、伊能忠敬の測量日記にもその名が登場する。現在も県道として認可されたまま、かつての名残をとどめている。

4間道路(道幅約7.2m)のクランク



左)表通りから裏通りまで町の至る所に水路が張り巡らされ、大屋川からひかれた清らかな水が流れる。右)全国行脚で布教活動した是徳の碑。講師の藤原さんによると、但馬で40数基、そのうち14基が養父市で確認されている。



中野醸造で特別に明治時代の醤油蔵を見学させていた。昔ながらの醤油蔵では耳をすますと、「フツフツツツ…」と醤油の発酵する音が聞こえてくる。



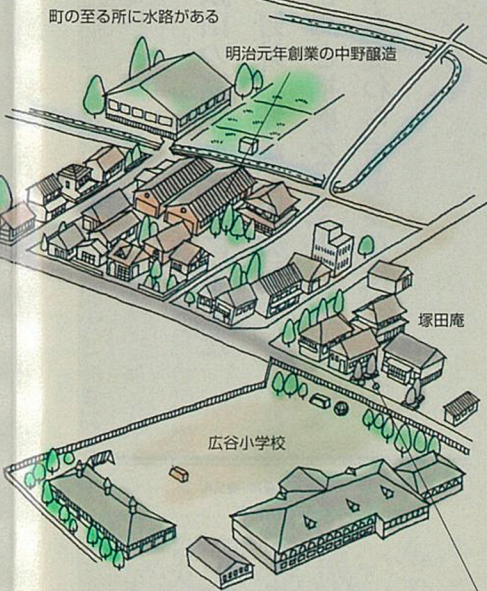
塚田庵にある石碑の説明を受ける参加者の皆さん



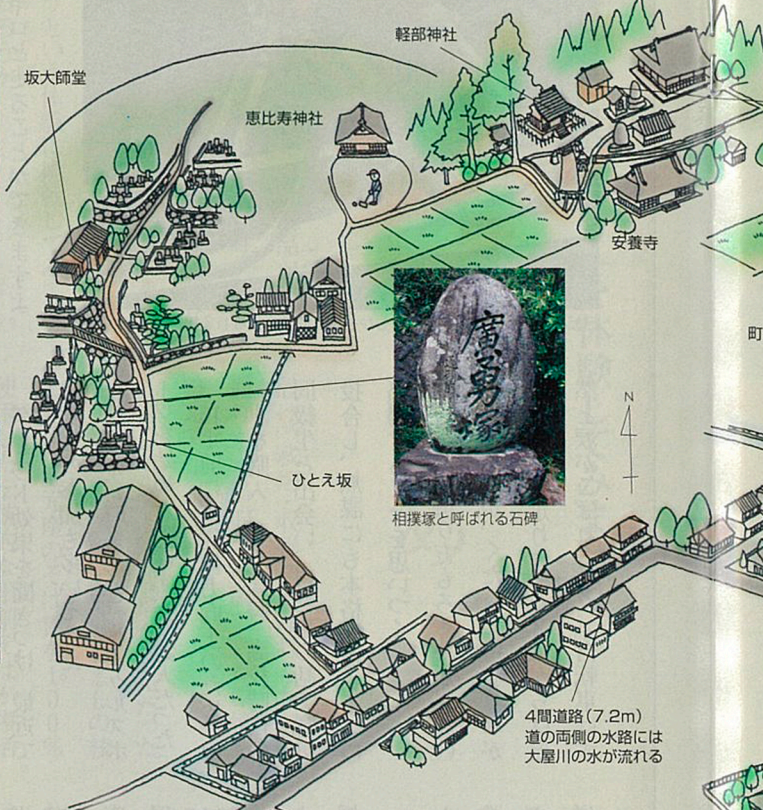
供養塔の脇にあるのはカ石。村の青年たちの娯楽として、カ比への遊びに使われた。



各村にひとつずつあり、共同で使っていた郷蔵ではないかといわれている



明治時代、広谷では醤油や酒の醸造を営む店が多かった。4間道路のほぼ直線上に位置する軽部神社には毎年「かるべの郷」という銘酒が奉獻されている。



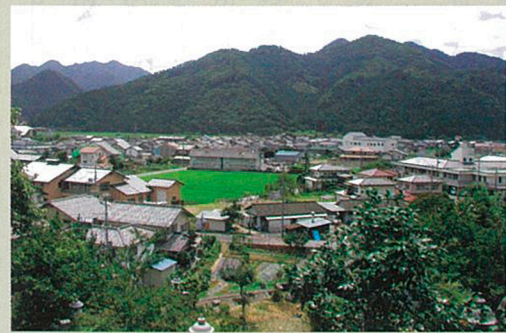
相撲塚と呼ばれる石碑



墓地の中を縫うように、細長く延びるひとえ坂。登り口から頂上付近まで石畳で舗装されている。

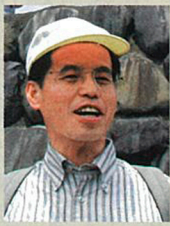


坂大師堂のお話を聞かせてくださった広谷の谷口弘文さん



ひとえ坂から眺めた広谷の町並み

●裏路地探険隊員募集
 平成17年10月8日(土)
 「前田純孝の故郷を歩く」浜坂町諸寄
 *実施日の10日前までに、18ページ掲載のT2編集部へ、住所・氏名・年齢・電話番号・「裏路地参加希望」とお書きの上、ハガキでお申し込みください。開催は午前中、現地集合・現地解散となります。申込締切日後、案内を参加ご希望の方へ送付致します。



今回講師を引き受けてくださった教育委員会の藤原弘幸さん

力士を讀んでいる。少し登ると、坂大師堂という小さなお堂がある。地元ではここに祀られている小さなお地藏様を借りたという風習が残る。子宝に恵まれない夫婦がこのお地藏様を持ち帰ると、不思議に願いが当たるのだとか。

坂の頂上付近からは、広谷の町が一望できる。かつてここから眺める景色は、街道を行き交う人々に町のにぎわいを伝え、大きな安堵感を与えたことだろう。

山々に囲まれた穏やかな町並みは、今も昔と変わらず、心を和ませる。